No.16　平成20年6月　沖縄県衛生環境研究所

衛環研ニュース

Okinawa Prefectural Institute of Health and Environment News

ご　あ　い　さ　つ

所長　稲福恭雄

平成20年4月1日付けで辞令を受け、南部医療センター・こども医療センターから赴任して参りました。衛環研ニュースの紙面を借りて一言ご挨拶を申し上げます。

私は昭和49年に北海道大学を卒業後、直ぐに沖縄に戻りました。その後24年間の沖縄県立中部病院での臨床を経て、沖縄県福祉保健部で8年間行政に携わり、その後また2年間の臨床に戻りました。長年、沖縄県衛生環境研究所(以下「衛環研」)の外にいて多少なりの繋がり、関心を持ちながらこの度の就任となりました。

さて、現在の沖縄県衛生環境研究所は昭和21年に中央衛生試験所として立ち上がり、昭和45年沖縄公害衛生研究所、昭和47年本土復帰に伴い沖縄県公害衛生研究所になり、昭和55年に現在地に庁舎新築、平成6年には沖縄県行政組織規則の改正により沖縄県衛生環境研究所に改称され現在に至っております。その間60年余にわたり、その時々の社会の変化、要請に応えて多くの業績を挙げてきたのは周知の事実であり、多くの諸先輩方の努力の賜であります。これらを大分類で列挙すればハブに関する研究、レプトスピラや寄生虫などの感染症に関する研究、赤土流出や大気汚染などの環境に関する研究、海洋性危険生物に関する研究など輝かしいものがあります。そして、これらの研究を継承、発展させるとともに更に新しい時代の要請に応えていくことが我々の使命であると考えます。

一方、ここ10年の社会経済の動きをみれば、バブル崩壊に始まり夕張市に象徴される地方自治体の財政再建団体への転落など全てに於いて財政面では危機的な状況にあります。県の施設といえどもその厳しさから逃れる術はなく、一部を除いては各地方衛環研においても例外なく研究資金確保に苦労されているとの話も耳にしています。加えて、民間機関の調査研究が一昔前と比べると採算性の取れる分野においては飛躍的に充実しており、以前よりも地衛環研としての存在意義を問われる状況が生じつつあると思われます。

このような厳しい状況の中で、如何に先程の使命を果たしていくか、今一度全員が立ち止まって考える必要があります。行政機関としてやるべき通常の仕事をこなしながら県民の期待に応える。その為には継承すべきものは継承しながらも優先度に基づいた厳しいまでの取捨選択が必須であり、新型インフルエンザ、新興感染症や食の安全などの健康危機管理に対し調査研究を踏まえた提言をするなど危機管理機関の一つとしての意識を鮮明にします。また、産学官連携が叫ばれて久しくなりますが、沖縄に特徴的なその種の研究にもより主体的に取り組み、知的財産に繋げていく。これまでも縁の下の力持ちとして沖縄県の観光産業などに貢献してきていますが、所内で行われている研究には咲くべき花の蕾が多々あると思われます。所員一人一人が常にその様な意識を持つ事も今後要求されるでしょう。

以上、着任挨拶としては少々厳しいとは思いますが、敢えて問題提起を行い、所内は勿論、所外の方からのご意見を伺いつつ議論を重ね、さらに信頼される衛環研となるよう所員と共に努力したいと考えております。

今後ともよろしくお願いいたします。

目　　次

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
無承認無許可医薬品にご注意！・・・・・・・・・・・・・・・2
米国原子力艦の寄港に伴う放射能調査・・・・・・・・・・2
蚊に刺されないようにご注意！～渡航先での感染症～・3
レプトスピラ症に気をつけよう・・・・・・・・・・・・・・4

これまでご愛読していただいた衛環研ニュースは都合により次回から沖縄県ホームページ及び沖縄県衛生環境研究所ホームページのみの掲載になる予定です。今後とも宜しくお願い致します。(情報委員会)